正 木 坂 道 場

現在の道場は、芳徳禅寺の先代住職、橋本定芳さんが約 30 年の年月をかけて、昭和 40 年春にようやく完成したもの。道場が建つこの場所は、もとは柳生十兵衛の弟、友矩の邸宅跡に建てられた。宮本武蔵が訪れたといわれる当時の柳生道場(正木坂道場)は、現在の市営駐車場の辺りにあった、といわれている。

道場の屋根や柱などの構造物は、もと興福寺の別当だった一乗院の建物。屋根部分と柱は一乗院、玄関は京都所司代の玄関、床や壁は新調と組み合わされて完成した。

剣道に座禅の心を取り入れた「剣禅一如」の柳生新陰流の精神にも通じる道場。「相手を切らずに勝つ日本で唯一の古武道」といわれる同流派。座禅を組み心を無にすることが強くなる秘けつなのかもしれない。　　（インターネット参照）

ラジオウォークなどで有名な青山茂先生の「奈良の街道筋」に、この橋本定芳住職のことが出てきます。池田さんの書かれることとダブルかもしれないのですが、僕はこの「奈良の街道筋」が好きなので、引用してみました。

『一方、家老屋敷の向かいの小山の上にある菩提寺と墓所も明治維新後、荒れるにまかせていたのを、橋本定芳という熱血の僧侶によって復興することができたという。明治以後、無住で廃墟のようになった柳生家の菩提寺を、大正十年に尾張の柳生家の尽力で再興したが、その維持管理をまかされたのが橋本師で、芳徳寺復興と柳生再興に一生を捧げたはじまりである。

念仏三昧ではなく、社会に打って出て仏教を、と橋本師は精神薄弱者の救済事業に乗り出し、寺の一隅にその収容施設の「成美学寮」を開設した。一方、柳生のイメージを広めるために柳生新陰流の関係資料を収集し、五味康祐氏にそれらの資料を提供して『柳生武芸帳』の陰の支援者ともなっていた。とともに、柳生新陰流の実際的な復興と普及のために、興福寺一乗院塔頭を使用している裁判所の古い建物の一部を譲り受け、これで芳徳禅寺の坂下に「正木坂道場」を完成させた。昭和四十年、橋本師はすでに七十五歳の老齢であったが、青年のような情熱は失っていなかった。かつて柳生道場の名は天下にとどろき、宮元武蔵や荒き又右衛門の剣豪も訪れたほどである。復興した道場の中で剣法の指導者として八方手を尽くし、新陰流の伝統保持者とされる大坪氏を招き、さらに大坪氏を通じて山岡荘八氏とも交際を重ねるうちに、小山田家老屋敷の保存話が出たのだという。四十七年一月、橋本定芳師老僧は八十二歳の一生を閉じたが、少なくとも柳生の里を現在のようにあらしめた第一の功労者はこの人、個人に帰せられるものではないかと思う。同師の顕彰碑を建てる運動が村内で起こり、五十三年一月、正木坂の傍に建碑された。』　　（「奈良の街道筋」青山茂より）